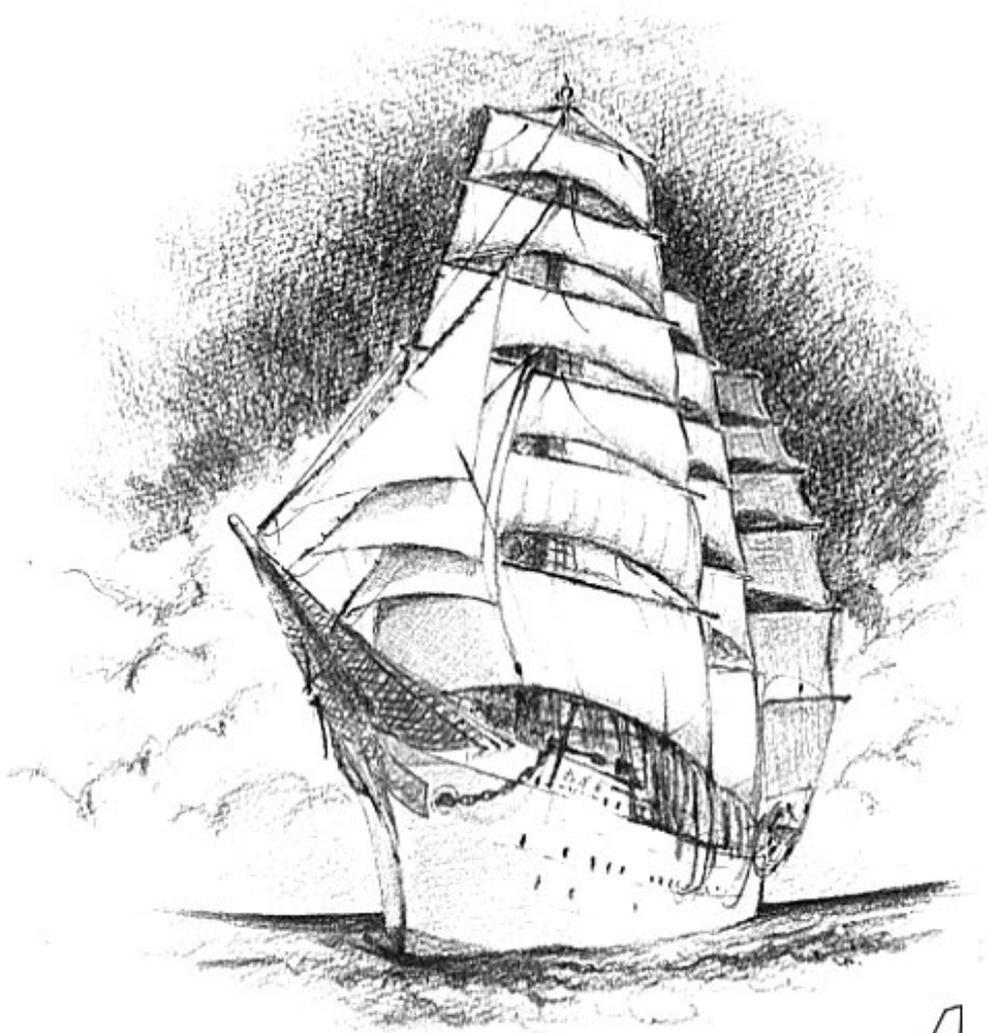


平成28年4月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻4月号(通巻681号)

風土



4

葱坊主

神蔵器

柱に吊つて白米三合雀の子

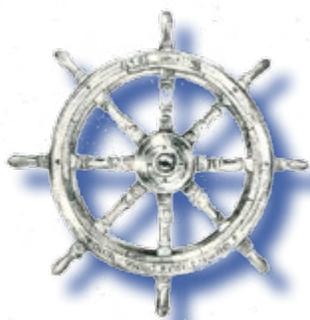
日時計に松は花粉を漲らし

のこる世はあそびをせむか花こぶし

てふてふと黒文字垣に添ひて行く

ひらがなのうたくるほしき西行忌

まだ眠る力のありて目借時
たんぽぽや青空に書く遺言書
花種蒔く合掌に土着せかけて
燕来て書き込み多き農暦
桃咲いて画布より出でし麗子像
病み臥して一心不乱に葱坊主
浮世絵の由比の高波春惜しむ



竹間集

同人作品



ビルの口

柿沼盟子

若水やまだ輝ける月ありて
ペン胼胝の瘦せてはをらず初仕事
松納め四角に戻るビルの口
寒鯉や水の濁りの薄らぎて
粗熱をとりて焼きいも麻痺の手に
寒き日の三列に待つ始発かな
冬の水ゆつくりと吸ふ鉢の土

初湯

高村令子

どつぷりと米寿至福の初湯かな
生かされていい息で吹き七日粥
左義長に遅れ輪の端ゆずらるる
とんど焚くためらふ事もなく老いて
繭となる一村春の雪日和
雪山を四囲の砦に峽ぐらし
遅き子に労ふ言葉おでん鍋

初湯

土井三乙

大年も灯点し頃や湾に船
まなかひに小島ひとつや初明り
先客に御慶申して露天風呂
水飲んで冷ます初湯の熱りかな
初湯して体重測ること省く
けふ二度目なれど初湯の心地して
宿を発つ前の一ト風呂雪あがる

懷 手

根岸 善行

風が押す歳が年押す去年今年
手を振つて歩けば冬もあたたかし
女房に隠し事ある懷手
鳴いて散り鳴いて集まる寒雀
着ぶくれて妻は転べるごとく行く
流るるを怠つてをり冬の川
底冷や小股で歩く妻の音

寒 椿

林 いづみ

霜のこゑ束ねし本を捨てかぬる
梅ふふむ文学館に入館証
雪催ひ軒あんだんの灯りけり
去年今年つなぐ一誌のころざし
淑気満つ床に据ゑたる丹波壺
笹子鳴く鎌倉近代美術館
寒椿明窓浄机に墨を磨る

多喜二忌

小林 共代

多喜二忌や軍手軍足裏に干す
如月の光りとなりて鳥の翔つ
川風を浴びて膨らむ猫柳
初怒濤伊八の岬揺らしをり
一節の謡に始まる初句会
初芝居菊五郎より菊之助
信濃路の一会の宿に狐鳴く

探 梅

中根美保

菰卷の松が囲みぬ古墳山
冬薔薇葉草園に花つづる
錦木のとことん枯れてゐたりけり
樹の皮の裏にあまねき楷火かな
ゴルフ場裏に至りぬ探梅行
白梅や厚くなりくる峡の雲
古雛の何か足らざる何ならむ

竹間集作家特別作品

赤の広場

田中佐知子

冬のロシアへ葛根湯を持たさるる
冬帝の都へ機体高度上ぐ
目覚むれば雪の原野の上空に
大聖堂弾の刺さりしまま凍つる
ネバ川の氷らんとしてさざめける
エルミタージュ窓にクリスマスツリーの灯
冬灯ミーシャの飴は琥珀色
モスクワの灯り近づく冬木立

レーニン廟警護の肩に雪降りつぐ
無名戦士の墓に横たへ冬薔薇
雪の夜のボルシチは血の色をして
クリスマス市赤の広場を占拠して
イースターエッグ赤の広場に聖樹立つ
外套の幸を占ふコイン投げ
「白鳥の湖」落葉氷りゐて
特派員スポットに立ち悴みぬ
雪踏んでモスクワ大学目指すなり
冬晴や腕を翼にガガーリン
窓は雪少しぬるめのみそスープレ
アルバート通り レストラン「ガポーシヤ」

暖炉の炎日本時間を思ふなり

山河集

同人作品



田村すゝむ選

御慶のぶ日本の美^{うま}し言葉もて
落合 絹代

深入りす森一筋の恵方道
森深く展く神宮淑氣満つ
雪の夜は墨の香にあり俳画描く
原稿紙二桝ほどに日脚のぶ

躓きて繕ひ顔す年の暮
須藤美智子

去年今年鐘撞堂に百八人
伊豆の海初日生み出す力かな
待春のこころ膨らむ思ひあり
日脚伸ぶ歩く運動日課とす

みささぎに続く玉砂利初山河
雲所 誠子

身の内を貫く流れ寒の水
言祝に添へし天賞初句会

嫁してより家訓に生きて七日粥
絵馬多き湯島天神梅の花

日脚伸ぶ賢治のてがみ読む館
春田とは呼ぶには早し南部領
新田 秀子

冬麗南部盆地を句帳手に
山笑ふ一山越えて夫の里
亡母の記を書き始めたり去年今年

紫に暮れゆく山河牡丹鍋
大寒の河をはさんで生活の灯
吉永すみれ

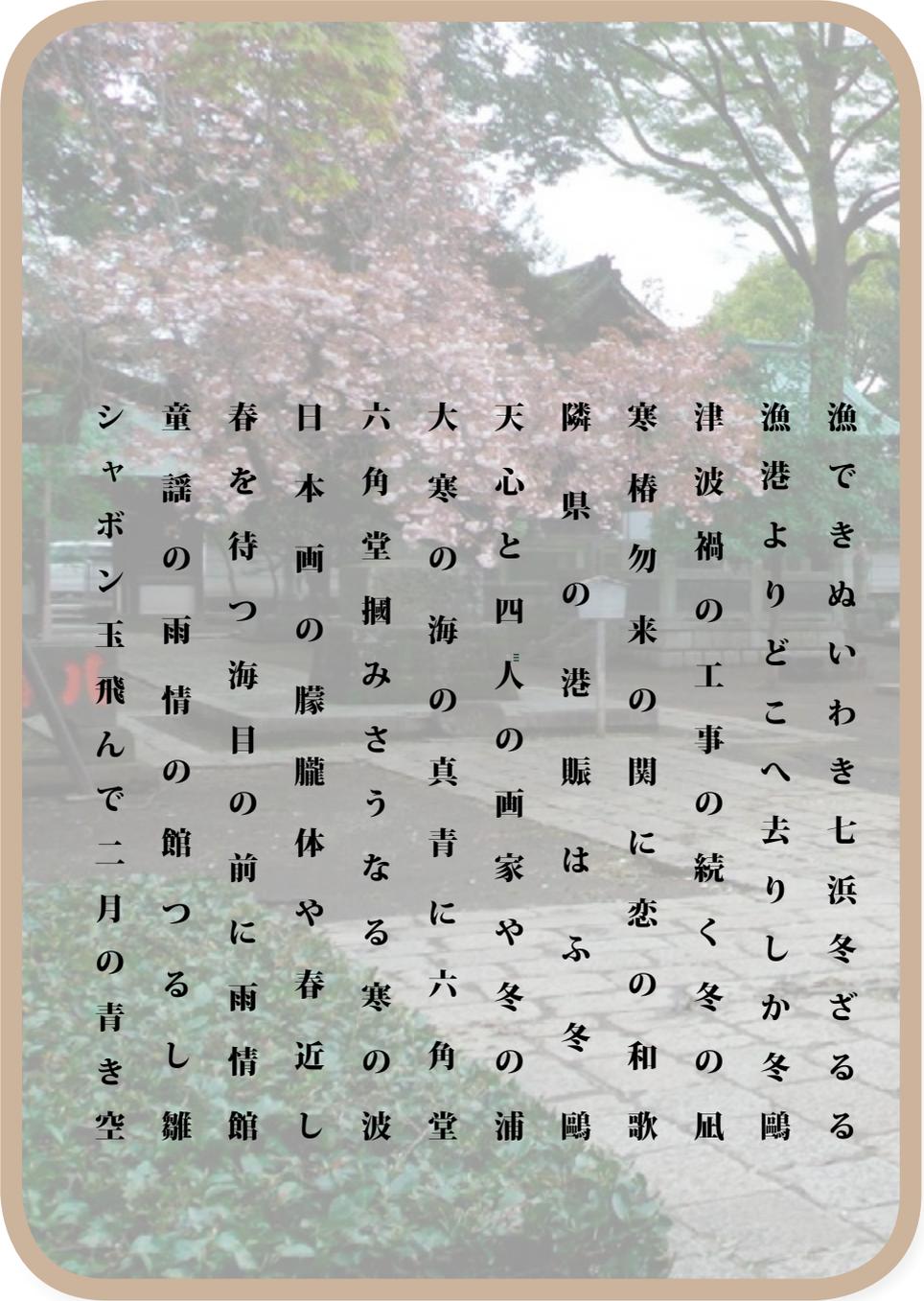
水の神火の神祀り年迎ふ
襖絵の虎が目をむく寒夜かな
数へ日や一筆筆の走り書き

◇特別作品◇

春待つ港

森高 武

膝押して登る灯台水仙花
灯台に登れば速し冬の雲
岬より光溢れし冬の海
冬うらら砂浜の絵に遊ぶ子等
坑口の奥の真闇や篋子鳴く
トロッコと閉ざす坑口枯木山
冬天にフタバサウルス首を上ぐ
風花や鯨のやうな水族館



漁できぬいわき七浜冬ざる
漁港よりどこへ去りしか冬鷗
津波禍の工事の続く冬の風
寒椿勿来の関に恋の和歌
隣 県 の 港 賑 は ふ 冬 鷗
天心と四人の画家や冬の浦
大寒の海の真青に六角堂
六角堂掴みさうなる寒の波
日本画の朦朧体や春近し
春を待つ海目の前に雨情館
童謡の雨情の館つるし雛
シヤボン玉飛んで二月の青き空

風土集



神蔵器選

寒満月若草山に火を放つ 福生 雨宮 桂子

夢殿や冬木の桜立ちしまま

鐘氷る秘仏は固き扉を閉ぢて

夢違 観音に会ふ春憐

寒晴や尼僧の走る門跡寺

散髪のケーブを開て年の暮 東京

四方より『風土』を開く炬燵かな

一行は夢を記せり初日記

どんど焼き火は森になり海になり

投ぐるもの一つになりぬんどかな

青竹に替へる笥の淑気かな 川崎

またたきて日ごと臘梅花ふやす

冬ばらや半六角のサンルーム

動くものなき大寒の生簀かな

梢まで主張のありし大枯木

中嶋 陽子

鈴木 庸子

冬かもめ波を走つて飛び立てり 川崎 内藤 静

人寄れば威儀を正せり寒牡丹

をどこ手に袱紗さばくも淑気かな

薄氷を踏みつつゆくか山頭火

春立つや「こども一〇番の家」

けふ明日へ繋ぐ命の初明り 千葉

七十路の初夢に見し英会話

家族ひとり増え初春を集ひけり

琴の音流す三日や蕎麦どころ

五十年会はずの友の賀状かな

初雀屋根よりこぼれ円覚寺 川崎

霜柱踏みてかけ出すランドセル

面影や母の部屋より豆を撒き

日に一度開けるポストや童の玉

植木屋の鋏の先に日脚伸ぶ

井口ふみ緒

上村 葉子